

『御巫本日本書紀私記』所載の体言のアクセント

上野和昭

—

『御巫本日本書紀私記』(以下『御巫本』とよぶ)に差された声点に反映したアクセントは、金田一春彦博士によれば「鎌倉時代のアクセント資料」であり、同じ鎌倉時代のアクセントを研究した『四座講式の研究』でも処々に引用されており、秋永一枝氏の『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』(以下『研究篇上』とよぶ)においてもしかりである。また二拍名詞第四類・第五類の別について、本書を利用した大原孝道氏の研究があり、以後この問題についての論争が続いた。しかし、本書全体をアクセント資料として扱った研究は未だにみない。それはすでに、この時代のアクセントについては、金田一博士等によっておおよそ明らかにされていることにもよる。だが、本書が比較的扱いづらい資料であることも原因の一つであったろう。すなわち、上代文献の注記であるから語義未詳の語が比較的多いうえに、様々なアクセントを反映する差声がなされており、その処理にきわめて注意する必要がある

こと、またさらに差声形態も大部分が墨点に朱を重ねるといふ複雑なものであるために研究が遅れたものと思われる。すでに紹介されているとおり、本書は髪長吉叟が八十一歳にして平野神主家蔵本を借り、応永三十五(一四二八)年正月十日に神代上、同月十五日に神代下を書写し、さらに二月二十日・二十一日両日かけて朱を写し入れたものと識語にある。その声点はへ上へ平二様のものであり、へ去へ東の如き院政期以前の様相を呈する声点は見出されない。

本書と同系統の本に、彰考館所蔵本(以下『彰考館本』とよぶ)があるが、こちらの方は、識語から延宝六年に佐々宗淳が日野家所蔵本を書写したものと知られる。声点は朱点のみであるが、差声位置などに、その意味を理解せぬ者が携ったかと思われる乱れがあり、全体としては『御巫本』に劣るものと思われる。しかし、『御巫本』の声点では理解しがたい箇所が、『彰考館本』で説明できる場合もあり、本稿でも時折援用することにする。

本稿では一・二・三拍名詞について、本書の声点注記をもとに

分類して考察するが、四拍以上は末尾に一括して掲げる。なお、本稿で用いた略称および準拠本は左のとおりである。

書紀(日本書紀) / 和名(和名類聚抄) / 名義(類聚名義抄) / 色葉(色葉字類抄) / 古今(古今和歌集声点本) / 拾遺(淨弁本拾遺和歌集) / 四座(四座講式) / 前本(前田本) / 京本(東京大学国語研究室蔵本) / 伊十本(伊勢十卷本) / 図本(図書寮本) / 観本(観智院本) / 高本(高山寺本) / 鎮本(鎮国守国神社本)

図本書紀: 石塚晴通「図書寮本日本書紀本文篇・同永治二年頃點本文篇補」(『北海道大学文学部紀要』27-2) / 前本書紀: 石塚晴通「前田本日本書紀院政期点本文篇補」(『北海道大学文学部紀要』26-1) / 和名: 馬淵和夫「和名類聚抄声点本文および索引」 / 図本名義: 『図書寮本類聚名義抄本文篇』(勉誠社) / 観本名義: 『天理書本叢書』 / 高本名義: 同上 (三宝類字集) / 鎮本名義: 望月郁子「類聚名義抄四種声点付和訓集成」 / 前本色葉: 『尊経閣叢刊』 / 古今: 秋永一枝「古今和歌集声点本研究索引篇」 / 拾遺: 築島裕「淨辨本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」(『國語アクセント論叢』) / 四座: 金田一春彦「四座講式の研究」

二

一拍名詞(へ上) / 上(印は「御巫本」で一般助詞が(へ上)となるもの、△の印は同じく一般助詞が(へ平)となるもの(以下同様))

(1) 香・子・此・其・鈎・戸・名・音・端・日・(2) 樋・船・身・女・裳・男・(3) 尾・緒

右の語のうち、「名・音」の二語は、一般助詞が付けば(へ上) / 平

となる第二類である。また「樋・女・屋・裳」の四語は、一時代前までは去声点が差されていた語である。

(1) 「香」この語、本文には「加字留和之久之巨(へ上平平上上上平)」「(三十ウ2)」とあり、書紀「崇華」の訓で日本古典文学大系「日本書紀上」では「たかくかざり」と訓ませる。「華」を注文の「加」に当てるのは音が合わないので、一応「香」と解しておく。

(2) 「樋」本文「比波奈津(へ上上上上)」「傍点は双点であることを示す。以下同様)」「(十三ウ4)」とあり、「廢渠槽」に付された訓である。「はなつ」は三拍動詞第二類で○○○だったろうし、「ひ」は現代京都で●●(『日本国語大辞典』小学館・以下「大辞典」とよぶ)であり、「御巫本」でも(へ上)であるが、『嘉禄本古語拾遺』「乾元本・弘安本書紀」では(へ去)であるという。ところで、ここに記された声点は単語連続のかたちをあらわしている。しかしそれならばわざわざ連濁形をとるのはおかしい。これについては秋永氏の見解があるが、筆者は、本書の声点付の祖本ができる段階で、(へ上平平上)という差声のものと、(へ上上上平)ないしは(へ上平平平)のような単語結合連濁形とを校する必要がある、前者からはアクセント形を、後者からは連濁形をそれぞれ採用したのではないかと推定する。

(3) 「尾」他の資料では第三類(へ平) / 平(上)に属しているが、本書では明らかに(へ上)の声点が差されている。しかしこの箇所は声点が乱れているところで、「曾乃加志良遠々古加須(へ上上上上上上上上上上)」「(三ウ4)」とあり、書紀「揺(其首尾)」を訓

読したものである。問題の「尾」はしばらく措くとして、まず「かしら(首)」には「上上平」 ∇ という新しいアクセントが反映している。また「うごかす(動)」も、「古」に差された「上 ∇ 」二様の差声は、「上 ∇ 」の方が「平」 ∇ とらしく、そう解すればここは「平上上 ∇ 」と、期待されるかたちに近くなる。しかし『御巫本』では朱墨ともはっきり差声されているので、すでに平野神主家本書写以前に何らかの錯綜があったと思われる。「遠々」の部分はさらに難しいが、「かしら(首)」の次の「遠」を助詞と誤認して「上 ∇ 」を付した可能性もある。また下接の「うごかす(動)」を「平上上 ∇ 」とした場合、本書で「字」に付している「上 ∇ 」は、その上の「々」の「平」 ∇ となり、「々」の「上 ∇ 」も「遠」の「平」 ∇ となる。「加志良」の「良」の「平」 ∇ と「遠」の「上 ∇ 」とは接近していたために紛れたとみることもできる。こうなると、尾は「平」 ∇ で好都合だが、これに続く助詞「を」が「平」 ∇ となって異例となる。ともかく、ここは新しいアクセントが混入したり、差声に誤認があったりする箇所、そのために「尾」のアクセントも「上 ∇ 」とされてしまったものだろう。

一 拍名詞「平」 ∇ 「上」 ∇

群・吾。木・木・田。(1)手・瓊。(2)根・火・目・目・井

(1)「手」この語(十四オ4)に「手乃」 ∇ とあるが、「之利倍天余」 ∇ 「五ウ1」・「志利倍手」 ∇ 「三十一ウ4」という例がある。これらも「手」のアクセントを考えるうえで問題となる。「シリヘテニ」 ∇ 「図本名義三〇六4」のようにあってほしいところである。

(2)「根」この語、本書に四例あるが、なかに「祢奈介平上 ∇ 」(二十七オ6)の例も混っている。これは書紀「不幸」の訓で、「音無けむ」ではアクセントが合わず、差声者は「根無けむ」のつもりだったか。また「祢乃久余倍」 ∇ 「八ウ1」という例がある。「乃」には「上 ∇ 」(墨ノミ)「平」 ∇ (朱墨重書、合点アリ)二様の差声がなされている。これもやはり吉甕が書写した時には、すでにこうなっていたのであろう。これも「上上上平」 ∇ と「平上上平」 ∇ との声点を差した資料があったとみるべきであって、『御巫本』の成立の過程で両説を併記し、一方に合点を付し、また最初に朱を入れた者もこれに賛成したものと思われる。

三

二 拍名詞「上」 ∇ 「上」 ∇

葦・姉。(1)岩・魚・食・浮木。(2)姐・膿・槽・面・風・顔・雉・傷・君・口。(3)國・頸・腰。此。先。酒。狭田。多・様・末・底。(4)手火・妙・爪。釣・鴉。友・鳥。法。備。二。蛇。臍。右。御子。御衣。溝。御田。御釣。道。海驢。水。陰部。御名。宮。虫。旨。裏屋。穀。由。丘

このうち、本書以外の資料を検すると、「面・穀」は「平上 ∇ 」とあり、「腰・多」は「平上 ∇ 」、また「法」は「上上平」 ∇ とあって、本書の声点と一致しない。

(1)「岩」この語四例であるが、うち二例は神名であり、また他の一例は複合語の前部要素(伊巴半良上上上 ∇)である。残る

一例は、「其乃・伊巴余へ上上上」(十三オ)とあって、書紀本文「入其石窟」を訓んだものである。「岩」は他の資料からすると「上平」だから、ここに「上上」 \searrow とあるのは不審である。しかし書紀本文の「石窟」は「いはや」と訓む方がよいように、おそらくは「伊巴也余へ上上上」 \searrow とあったものが、「巴」と「也」との字形が似るところからこのような誤記が生じたものと推定する。

(2)「国」この語には二例、検討を要するものがある。

①久余八へ平上上 \searrow (二十四オ3)

②祢乃久余倍へ平上上上上 \searrow (八九ウ1)

①は「上平」であるが、『彰考館本』には「上上」 \searrow とある。いざずれ書写の過程で生じた誤点であろう。また②は、助詞「倍」の付き方について注意しておく必要がある。奥村三雄博士の説に拠って「モ」に準ずるアクセントだった \searrow としてみると、この時代には○であり、『四座講式の研究』(418、42)ではこの類●●● \searrow ●●○となっていて本書と合致する。

(3)「手火」本文「太比旦へ上上上」(五オ4)とあり、書紀の「為兼炬而」に当る訓である。おそらく「太比止志旦」とでもあったものだろう。「手火」は明らかに「手」と「火」との複合名詞であるから、少なくとも低起式であって欲しいところである。

『彰考館本』では「上上上」 \searrow とある。
二拍名詞へ上平上上 \searrow

(1)網・石・(2)大人・内・氏・威・上・母・門・頃・幸・下
・鳩・(3)立・(4)綱・度・新・機・(5)人・威(恩順)・(6)貴・

①故・業。

(1)「網」平安時代第三類「上平」 \searrow で、「阿美「上平」(網碧、京本和名中五43オ8、伊十本和名五19オ9)「アミ「上平」(網碧、観本名義法中六二オ5)のように他資料にみえる。『御巫本』の例は歌謡のもので、差声は朱のみであるが、明らかに「上平」(二十四オ1)とあって、○●●○という変化後のアクセントを反映したものであろう。

(2)「大人」本文「字之へ上上上」(十九ウ5)とあり、「上上」 \searrow とも「上平」 \searrow とも考えられる。『彰考館本』も「上上」 \searrow となっており前項に入れるべきかもしれないが、現代京都では○(『大辞典』)であるから、ここは「上平」の方を優先した。

(3)「立」この語、「古乃太知へ上上上」(二十八オ1)から抽出した。書紀本文の「木株」に当る訓である。複合した四拍語とみれば「上平上平」 \searrow の部類に入れるべきであるが、複合以前の単語連続のかたちとみれば、「立」は二類動詞「立つ」の派生名詞だから、○●●○の変化を経たことにならうか。今一応そう解しておく。

(4)「綱」この語も平安時代には「上平」 \searrow であつたらしく、「タヒへ上平」(綱、世尊寺本字鏡一五四オ2)、「多比「上平」(綱、前本和名八22ウ6・伊十本和名八23ウ8)、「タヒ「上平」(綱、観本名義僧下三ウ7)のような例があげられる。本書には「安加目へ上上上」太比「上平」(二十九ウ3)と二行になつており、書紀本文の「赤女綱」の訓である。したがって、これも○●●○の変化後のアクセントを反映した差声であろう。また、全体を一語

とみればへ上上上上平」というかたちの五拍名詞となる。

(5) 「人」この語、へ上平」となるのが殆どで、一般助詞も規則的に付く。しかし、その中に「比止々奈留へ上上上上上上平」(四オ6)という例が二例ある。単語連続のかたちならへ上上上上上上上上平」となるべきであろうが、ここは複合したかたちで差声されていて、『彰考館本』同様。

(6) 「貴」本書には「武知へ上上上上平」(三ウ5)と両様の声点が差されているが、ここではへ上上平」(上)に収めた。

(7) 「故」この語、へ上平」で三例は問題ない。「うち(十五オ5)の「由保へ」は「由倍へ」の誤写であろう」ところが、(六ウ6)に「思加由倍仁」へ上上上上平」上とあり、「故」にへ上平」上とあり異例となる。『彰考館本』では「由」に声点なし。

二拍名詞へ上平上平上上上上平」

足・嘗(田)天・後威(蔵)・奥・鬼。(2)神・草・糞。(3)言(事)・賦・篠・潮・鳥・太刀・玉・土・時・年・殿・汝兄・後・梶・辱・浜・矛・元(故)。(4)者(物)・山・別。

(1) 「天」これは歌謡のもので、「阿妹奈麗夜へ上上上上上上上上平」(二十三ウ6)としてあらわれる。また「あま」はへ上上上上上上上上上上平」となる。(書記本文「天津神籙」これは「あま」と「ひもろき」とをわけて声点を付しているものである。『彰考館本』では、この箇所へ上上上上上上上上上上平」上とあり、「あま」は明らかに変化後の新しいかたちで差声されているが、『御巫本』の高起式差声もこのあたりから出た誤写が原因か。

上上上上」上とあり、「あま」は明らかに変化後の新しいかたちで差声されているが、『御巫本』の高起式差声もこのあたりから出た誤写が原因か。

(2) 「神」ほとんどみなへ上平」であるが、(十一オ6)「加美豆止比余へ上上上上上上上上平」が異例となる。しかし、この「加美」の部分では後から傍に墨で書足し、挿入箇所を墨点を施して示したもので、○●○の変化後の新しいアクセントを反映している。

『彰考館本』では注文本行中にへ上上平」とある。また、「神へ上平」(一ウ7)のように差声した例もある。(『彰考館本』声点なし)へ上平」を意図したものとみたい。この類の差声としては、「申取也へ上上平」(九オ7)・「何乃へ上上平」(二十三オ6)があるが、これらは低起式であることを示すにとどまっているようである。

(3) 「言(事)」「御巫本」では殆どがへ上平」であるが、なかに二例へ上上平」という変化後のかたちが見られる。一例は「也介曾古奈布古止へ上上上上上上上上平」(二十三オ1)とあって、『彰考館本』ではへ上平」の古いアクセントを反映した声点を差す。もう一例は、「以乃知奈加岐乎止へ上上上上上上上上平」(二十七オ2)で、こちらは『彰考館本』でも同様の本文に同様の差声がなされている。「コ」を「ヲ」に誤ったのは、先行片仮名文献でこれらの字体が似ていたためであろう。

(4) 「者(物)」この語も本来へ上平」であるが、へ上上平」のかたちを示す例が五例ある。このうち、「太奈豆毛乃へ上上上上上上平」(四オ7)「太奈豆毛乃へ上上上上上上平」(七オ6)「波良倍津毛乃

床・御祖・御顔・御櫛・御言・尊(命)・御魂・御髻・御髻・御髻
伴・み中・御席・女神・殯・裳紐・八目・八百重・四少女
・大蛇

(1)「親屬」四例中三例まで「上上上上」であるが、一例「上上上上」というのがある。「彰考館本」では、その箇所「上上上上」。

(2)「狹霧」二例中一例は「上上上上」。もう一例は「上上上上」。「彰考館本」同様。

(3)「五月蠅」本書では二例とも「上上上上」であるが、『彰考館本』では一方が「上上上上」となる。『乾元本所引日本紀私記』には「上上上上」、また『凶本・乾元本・弘安本書紀』には「上上上上」とあり、『乾元本・鴨脚本書紀』にも「上上上上」がみられる。『嘉禄本古語拾遺』には「上上上上」『曆仁本』には「上上上上」とあり、『拾遺』134も「上上上上」であるから、『御巫本』の「上上上上」は不審である。

(4)「平」この語名義抄の類で多く低起式であるが、『タヒヒラカニへ上上上上』(成、観本名義僧中二十二ウ3)・『タヒヒラカニへ上上上上』(成、鎮本名義三六〇ウ7)などと、同語源と考えられるものが高起式の差声もみられる。『彰考館本』も「上上上上」。

(5)「茅纏」本文「微方紀乃保古へ上上上上平平」(十一ウ5)、書紀本文「茅纏之稍」とある。また『古今』47には「上上上上」となっている(伏見官家本・家隆本・毘沙門堂本)。『御巫本』の場合不審なのは「乃」に差された「平」であって、あるいは●●●○

○○ではないかと考えられる。

(6)「所」本書には「上上上上」が六例、「上上上上」が二例、「上上上上」が二例、「上上上上」が一例あり、計十一例がみえる。いずれも連体修飾成分を承けているが、連語的になってアクセントが崩れたとも思えないから、低起式の場合に秋永氏のような解釈(『研究篇上』84頁)は、本書には適用できない。

(7)「扉」この語、古くから●●●○であって、本書で「上上上上」となる理由はわからない。『彰考館本』では「上上上上」。

(8)「戸脇」「上上上上」と「上上上上」とが一例ずつみえる。『彰考館本』でも、それぞれ同様の差声である。

(9)「御言、尊(命)」「勅」を表わすもの四例、貴人の尊称十二例あるが、後者に一例「上上上上」の例がある。『彰考館本』も同様。本文は「那以毛乃・美己止上上上上平・平上上上」(四ウ4)、書紀本文「姉者」の訓に当る。

(10)「髻」この語も「上上上上」(八オ1)、「上上上上」(八オ2)と、隣の行でありながら違った声点を差す。『彰考館本』も同様。

(11)「御伴」この語、本文「美乃毛奈留神乎へ上上上上上上」(二十四ウ4)とあり、書紀本文「從神」の訓である。ここでは、第二字「乃」を「刀」の誤写とみて処理した。

(12)「少女」この語については秋永氏に詳しい考察がある(『研究篇上』125頁)。ただ、そこに引かれた用例のうち、「上上上上」へ「上上上上」各一例のほか、さらに「鳥等咩」へ「上上上上」(二ウ4)もある。

この他「知波衣布留へ上上上上上上」(書紀本文「残賊強暴」)

や「末須乃美知」(へ上上上上上上) (書紀本文「賸勝」)のほじめの三拍分なども、この箇所でも扱うべきだったかも知れない。また「寵」とあるが、本来は「へぐひ」のことであろう。

三拍名詞 (へ上上上上上上上上) (上)

高田・辺・間・山岩戸・(2)片葉・首・(3)河原・(4)磯田・袴田・(向)後・當世・鱷・身破・(向)鱈・(向)結・娘・胸乳・(向)女子・(向)男子・小汀・女

「刃」・「身破」については、秋永氏に考察がある(『研究篇上』106)。また「首」が、○○○△○○○の変化後のアクセントを反映した差声をされていることについては先述した。

(1)「岩戸」 この語二例あって、今(へ上上上上上上) (十一オ五)の方をあげたが、もう一例には(へ上上上上上) (十一ウ一)とある。

(2)「片葉」 『拾遺』593に(へ上上上上上)とある。本書では(へ上上上上上) (二十八オ二)であるが、『彰考館本』も同様である。

(3)「河原」 この語(へ上上上上上) (十一オ六)の他に(へ上上上上上) (六オ六)のかたちも示す。上接語はないので単独で低起式になつてしまっているのは不審である。

(4)「磯田」 本文は「矩比田」(へ上上上上上) (十三ウ二)とある。「磯」(黒)

は高起式であるから(へ上上上上上)を優先する。

(5)「後」 この語、「シリへ(へ上上上上上) (後、高本名義二(二ウ五)シリへ(へ××上上) (後、観本名義仏上二十二ウ三)とあり、同語源の「シリ(尻)」も観本名義(へ上上上上上) (仏中六十九ウ・法下四六オ三)であるから低起式であつてほしいところであるが、本書で

は「志利倍手(へ上上上上上) (三十一ウ四)のように高起式の差声であり、『彰考館本』でも(へ上上上上上)とあり不審である。

(6)「鱈」 本書では「牟久呂(へ上上上上上) (書紀本文「身中」)で、第二拍は虫損のため声点は不明であるが、『彰考館本』では(へ上上上上上)となつており、「ムクロ(へ上上上上上) (身、高本名義四十六オ三)」「ムクロ(へ上上上上上) (身、観本名義仏上四十六ウ一)」「ムクロ(へ上上上上上) (質、観本名義仏下本十一オ三) 名義抄の類も右のように(へ上上上上上)でないし(へ上上上上上)、『平家正節』では○○○を表わす施譜がなされているから、本書の声点もそのもとは(へ上上上上上)であつたものと思われる。

(7)「結」 この語「也曾牟須比余(へ上上上上上上上) (『彰考館本』(へ上上上上上上上))を単語連統形とみて、(へ上上上上上)のかたちで抽出した。

(8)「女子・男子」とともに、もともとは、○○○△○○○、○○○△○○○であつたろうに、複合の強さから(へ上上上上上上上)のかたちが出たものと思われる(『研究篇上』139～140)。ここでは一応(へ上上上上上)の類に収めておく。

三拍名詞 (へ上上上上上上上上) (上)

籠・葉戸・力・八色

三拍名詞 (へ上上上上上上上上) (上)

如・粟田・齋・息吹・潮・楼台・特・弟・面・鏡・絶妻之誓・備・(山)背・類・手玉・踏躡・頭髻・千人引・唾・剣・長夜・瓊響・願・掘・袴・疾風・光・み谷・因象・族・齋庭

(1)「背」本文「曾比良仁八」(平平平上上) (八オ3) とある。

ここで問題になるのは、助詞「に」が低くついていることである。本書では、上接名詞の最後の拍が○でもないかぎり、一般の助詞は高く付くのが原則である。『彰考館本』でも(平平平平上)となっており、本文も錯綜した様子を見せていないから、あるいは「背」のアクセントは○○○ではなかったかと思わせる。これは次項(平平上) (平平上上)にも関わる問題であるが、「背」を○○○とみるには、第三拍が(平)と差声されている点に問題を残す。しかし、確かに(上)は(上)に差声されるようになるが、誤写という点からみれば、(平)とされてしまう可能性も大きい。

三拍名詞(平平上) (平平上上)

主・命・母・祖父・祖先・轉述・奇御戸・(1)心・(2)樹種・(3)劍柄△
・禰・長田・柱・(4)苗裔・(5)羅・一夜・(6)炎・豆田・(7)奴

(1)「心」この語本書には十一例出るが、うち(平平上)が八例、(上上上)が一例、(平上上)が一例、(平上平)が一例ある。(平上上)の例(十ウ1)は、本文もしっかりした箇所ではあるが、『彰考館本』には(平平上)とある。(平上平)の例は、「己々呂太江之(平上平上平上) (四ウ1)、書紀本文「悶熱」の訓である。下接語との複合の問題があるように思える。残る(上上平)の例は、「己々呂奈之」(上上上上) (八オ7)とあるところで、これは○○○の変化の途中で生じたアクセントを表

わすものと思われる。それだから、朱点を入れた者(平野神主家本成立以前において)は、第三拍以下をそのままにして、朱点を施さなかったものと推定する。

(2)「劍柄」この語二例あって、一方は「多加美乎利(平平平上平) (五オ1)、もう一方は「多加美乎(平平上上平) (八オ5)である。第二例の助詞「を」の付き方からするならば、「劍柄」は○○○というかたちになる。第一例からは○○○というかたちがでてくるので、『御巫本』には、少なくともこの両形が併存していることになる。

(3)「苗裔」この語、平安時代には○○○だったらしく、「ハツコ(平平平) (苗裔、凶本名義三三四4)のような例もあるが、一方「ハツコ(上上上) (裔、親本名義法中七三オ6)のようなかたちもみえる。本書では「波津古(平平上) (三十二オ3)というかたちで出る。(『彰考館本』同様)

(5)「羅」この語古くは○○○、のち鎌倉時代あたりで○○○となつたらしく、次の例をみればだいたいの流れがわかる。「比加介(上上上) (羅、前本和名下下下下下)」、「ヒカケ(上上上) (羅、前本色葉下91オ4)、「ヒカケ(上上上) (羅、親本名義僧上十九オ5)、また『拾遺』11⁴⁸には(上上上)とある。しかし、本書には(平平上)とあり、『彰考館本』にも(平平上)とある。このような状況なので、「羅」のアクセントについては、はっきりとしたことは言えない。

(5)「炎」この語、金田一博士が○○○と想定されたものである(『四座講式の研究』350頁)。本書の声点からでは、このことを

立証できぬが、かりに○○●であつても支障はない。

(6)「奴」この語平安鎌倉時代の頃は○●が普通だったようであるが、『前本書紀』(巻十一 15墨)では本書同様「平上上」(『彰考館本』同様)であつた。「平上上」と「平上上」の両形があつたのではなからうか。「ヤツコ」(平上上) (『図本書紀永治二年点巻十三 263朱)、「ヤツコ」(平上上) (『前本書紀巻十一 15墨)、「也豆古」(平上上) (『前本和名一 16ウ5)、「ヤツコ」(平上上) (『奴、高本名義五五オ1 婢、同五五オ2)、「ヤツコ」(平上上) (『奴、観本名義仏中八オ6 婢、同仏中八オ7)、「ヤツコ」(平上上) (『僕、高本名義一 一オ7)、「ヤツコ」(平上上) (四座27)

三拍名詞「平上上」(平上上)上
脚辺・(1)弟・妹・翁・老婆・清水・薦・背中・左・真・真名
井・尿

(1)「弟・妹」この一語一応「平上上」の類に収めたが、「以呂止」(平上上) (二十六ウ7) 書紀本文「妹」、「以呂止」(平上上) (三十オ3) 書紀本文「女弟」と二種ある。『彰考館本』ではいずれも「平上上」。また、この他の資料でも次のような例がみられる。「イロト」(平上上) (弟、前本書紀巻十一 9墨)、「以呂止」(平上上) (妹、前本和名一 19オ7)、「イロト」(平上上) (妹、高本名義五六オ7 観本名義仏中九ウ4)

他に「於保牟太加良乎」(平上上上上上) (五ウ5) 書紀本文「国民」の「太加良」の部分もこの類に収めてよいと思われる。但し『彰考館本』(平上上)上

三拍名詞「平上上」(平上上)上

(1)汝・(2)大目・限・限・飯床・千座・千筋・春女・汝妹・野
雷・(3)解除・辺・病

右の他に、「瓊矛」(二オ6)の條に「トホコ」(平上上)とあるのも、これに含めてよいと思われる。

(1)「汝」この語、三例中一例「以万志我」(平上上) (二十五オ5)とある。本書では助詞「が」は高く付くのが原則である。『彰考館本』では明らかに「平上」の声点を差す。しかし『御巫本』では、ちょうど「我」の左横中央ほどのところに差声されており、もとは「上」であつたのを写し損ねたものと思われる。

(2)「大目」この語「平保末乃」(平上上) (三十オ7)とあり、『彰考館本』には「平上上」(朱墨)とある。

(3)「解除」本文「波良倍乃」(平上上) (十四オ6)とあり、さらに第二拍「上」に墨書にて合点が付されている。

以上の他に「平上上」の声点が付された語が三語ある。
頗傾・利・澳

五

これで一拍名詞から三拍名詞までの整理を一応終えたが、右の考察から人名(神名)・地名の類は除外してある。また四拍名詞以上については、末尾に一括して掲げてあるので参照されたい。ところで、冒頭にも述べたように本書は一応鎌倉時代のアクセントを反映した資料と考えられてきた。以上の考察からもだいたいはそう考えてよいように思う。

本書の声点の表わすアクセントには、次のような特色がある。

神功・千頭〈平上平平〉 竹刀〔その他〕〈上上上上〉 太占〈上上××〉 諸〈上上××〉 御子達〈上上上上〉 後手〈上上××〉 客人〈平上上上〉 丈夫・沫雪〈平上××〉 紹羅〈平平××〉 只人〈××上上〉 風招〈××平平〉 潮満〈××平上〉 妻籠

注 *1 〈上上上上平上〉 *2 〈平上上上上〉 *3 〈上上上上上〉 *4 〈上上上上〉 *5 かほつち *6 〈上上上上平上〉 *7 もえくし *8 〈平平平上平上〉 *9 〈上上上上平上〉 *10 〈平平上上平上〉 *11 〈平平上上〉 *12 〈平上上上平上〉

五拍名詞 〈上上上上上上〉 暴急須・上固・先驅・遠祖・誓辞・使人・飲食物・陸田種子・人為・八尋殿 〈上上上上平上〉 赤酸漿・(赤女鯛)・産月・作金者・幸御魂・八咫鏡・作木綿 〈上上上上平上〉 八十連 〈平平上上平上〉 返事・志 〈平平上上上上〉 造綿者 〈平平上上上上〉 平上上上上 神道・傾使 〈平上上上上〉 持帶者 〈平上上上上上〉 平上上上上 寛坐 〈平平上上平上〉 称辞 〈平平上上上上〉 神懸・持帶者 〈平平上上上上〉 殺・百結〔その他〕 〈平平上上××〉 奇御魂 〈××上上上上〉 八入折

六拍名詞 〈上上上上上上〉 青人草 〈上上上上上上〉 上上上上上上 平上上上上上 青海原・無目籠・毘弁田 〈上上上上上上〉 青柴垣 〈上上上上上上〉 羽明玉 〈平平上上上上〉 平平上上上上 注連繩

七拍名詞 〈上上上上上上〉 高天原 〈平平上上上上〉 平上上上上上 茶服股・高胸坂 〈平平上上上上〉 弟棚機 〈平平上上上上〉 大御宝(民)

七拍名詞 〈平平上上上上〉 凶爪棄物 〈平平×上上上上上〉 平平×上上上上 湯津爪櫛

八拍名詞 〈上上上上上上上上〉 鶴・備・*1 八重書柴籠 〈平平上上上上上上〉 物語 注 *1 〈上上上上上上上上〉 *2 〈平平上上上上上上〉

- 注(1) 神宮文庫蔵【2744】一冊、受入番号 29699
- (2) 金田一春彦「国語アクセントの史的研究 原理と方法」(稿書房・昭和49-3) 224
- (3) (三省堂・昭和39-3)
- (4) (校倉書房・昭和55-2)
- (5) 大原孝道「近畿アクセントにおける下上型名詞の甲類・乙類の別の発生に関する一考察」(「国語アクセント論叢」法政大学出版局・昭和26-12)
- (6) 例外として(十六才2)に「寸較(フツ)……(去去・去去)」とある。(後半の去去は朱のみ)
- (7) 彰考館蔵 引出番号丑三 00524
- (8) 鈴木豊「古語拾遺」の声点」(「国文学研究」79・昭和58-3)
- (9) ↓注(8) 163頁、164
- (10) 国学院大学日本文化研究所編『校本日本書紀』下(角川書店・昭和50-12) 361
- (11) 奥村三雄「平曲譜本の研究」(桜楓社・昭和56-5) 443
- 「も」についてははかに川上兼「京阪語の「も」などのアクセント」(「田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論集」桜楓社・昭和54-8)などの論文がある。
- (12) 黒板勝美校注「新訂国史大系」8(吉川弘文館・昭和40

- 4) 61へ頭注。
- (13) 奥村三雄『平家正節語彙索引』(大学堂書店・昭和58—2)
- (14) 『天理書本叢書 古代史籍集』(八木書店・昭和47—7) 186へ4行
- (15) 鈴木豊『日本書紀神代巻の声点』(『国語学』136、昭和59—3)
- (16) ↓注(14) 186へ4行・262へ1行
- (17) 古典保存会複製本に拠る。
- (18) ↓注(14) 473へ6行・538へ6行、鈴木豊『古語拾遺声点付和訓索引』(礎稿)を利用した。

- (19) 大野晋「仮名遣の起源について」(『国語と国文学』二七—12、昭和25—12)
- (20) 金田一春彦「古代アクセントから近代アクセントへ」(『国語学』22、昭和30—9)、「国語アクセントの時代的変遷」(『国語と国文学』三七—10、昭和35—10)
- 桜井茂治「アクセント体系変化の時期について」(『国語と国文学』三九—9/11、昭和37—9/11)
- なお、本稿は昭和59年度文部省科学研究費助成による研究の一部である。

新刊紹介

秋永一枝・梶原正昭編

『前田流譜本平家物語一』

(早稲田 資料影印叢書3)
大学蔵

早稲田大学演劇博物館蔵の平曲前田流譜本十二巻二十四冊の影印。全四冊。本冊には、一巻上から三巻下までを収める。

この譜本は、従来、館山漸之進の識語から、江戸前田流五世の宗匠豊川沖一の編とされ、豊川本と呼称されていたものである。荻野知一検校の手になり、前田流の正本としてその後の平曲に多大な影響を与えた

『平家正節』と近似した譜記を持ち、『平家正節』の成立を論じる際には常に問題とされて来たものである。近年、他の平曲譜本が次々と刊行された中で、その公刊が望まれていた。今回の複製出版によって、本譜本の性格がより明確なものとなり、平曲譜本の歴史の解明が進展することは、間違いないと思われる。

本譜本の本来の譜記は、本文右側に朱でなされているが(ただし十二巻下は正節譜による)、影印においても、十分鮮明に見ることができると。続刊、解題が待たれる。

(昭59・9 早稲田大学出版部 A5判
七一八頁 一五〇〇〇円) [大津雄一]

編集部より

『国文学研究』では、会員の皆様の著作の紹介につとめております。新たに著書を刊行されました際には、是非一部ご寄贈下さいませようお願ひ申し上げます。研究上の貴重な資料として永く保存するとともに、広く教員・学生等の閲覧に供し、大いに活用させていただきます。また、お気付きの新书がありましたら、編集部までご一報下さい。